

洗橋下の怪

「米とぎチンジョキジョキ」

持田 永友 千秋

ずーっと以前の頃の話です。ある

月のない、やみ夜のことでした。

二人づれの婦人が、ペチャク

チャと話しながら、洗町か

ら、洗町を通り過ぎる時、

ひとりの婦人が、もうひと

りの婦人に、こわごと、

「この橋の下には、昔米と

ぎの化け物がい

たそうねー。」

と、話しかけまし

た。ところが、そ

の言葉が、終るか

終らないうちに、

怪しい声が橋の下から、きこえて

きました。



「いまでもおります、チンジョキジョキ。

いまでもおります、チンジョキジョキ。」

橋の上の二人の婦人は、

「キヤーツ」と叫び声を上げ、びっくり仰天し、真青になりました。そして、ガクガクするひざをこらえながら、後になり、先になって駆け出し、ほうほうの態で逃げ帰ったということです。

この橋の下の化け物の正体とは、宮越や川原の、水守の人で、その時刻に橋の下にいて、持っていた鍬をたたいたり、石垣でこすったりして、チンジョキジョキと、音をたてゝおどかした、ということでした。

法印さんが狐に化かされた話

小丸 山名重勝筆録より

小丸の秋月病院の南に、法印屋敷というお屋敷がありました。こゝは舞鶴城本丸の、鬼門（北東方向）に当たるので、城主が法印屋敷を造られて、持田、勝利の永友法印外数名の者を、住まわさせていました。

ある年の秋、よく晴れた日のことです。法印さんは、新田村のご祭礼に行かれるため、屋敷を後にされました。その途中の出来ごとです。

毛作のある家の石垣の上に、年老いた古狐が、いびきをたてゝ眠っているのです。一寸いたずら心を起こされた法印さんは、ソーッと近づかれて、持っておられたホラ貝を、狐の耳もとにあて、いきなりブーッと吹かれました。狐はびっくり仰天し、異様な泣き声を上げながら、一目散に逃げていきました。法印さんは、その様子に腹をかゝえて、カラカラと笑いながら、新田をさして行かれました。

平伊倉（飛行場の手前北側の地区）の坂にかゝる、松

並木まできた時でした。あたりがだんだん暗くなり夕暮れの様になりました。

法印さんは、ハテナ？と

思いました。屋敷を出た

のが、辰の刻（午前八

時頃）だったのだから、そんなに早く日

が暮れるはずはないと、思案しましたが

とうとう日がくれてしまいました。そこで

法印さんは、半分の根方に腰をおろして

しばらく休むことにしました。

法印さんは、ブツブツいいながら

行手の方をみますと、向うの方から、どうやら葬式の列が、こちらの方に向ってくるようです。見つかると厄介なので、あわてゝその松の木に登りました。葬式の列



は、やがて法印さんの登っている、松の木の上まで来ました。

松の木の上までくると、行列はそこに止まり、やがて数人の者が、松の根方の所を掘りはじめたのです。法

印さんは、気持が悪いので、だんだん上の方へよじ登りながら、下の様子を、こわごわと見つめていました。ところが、葬式の

列の者達は、その穴の中に、お棺を埋めると、一同どこ

もなく、消えるように引き上げていきました。

その後は全くの闇で

さみしくてなりません。

法印さんは、埋

められたお棺が、気になって仕方ありません。なおもジッと見つめていますと、今埋めたばかりの、お墓の所が、ムクムクと、動き出したではありませんか。

もう、怖くて怖くてたまりませんが、怖いもの見たさ



で、尚も目を光らせて見ていますと、何か亡霊らしい白い衣をつけた、老婆らしい者が、墓の中から抜け出して来たのです。そして法印さんの登っている松の木に、

ヒヨロヒヨロと近づくなり、はい上がってくるではありませんか。法印さんは、もう気が気ではありません。ブルブルとふるえる手足に、グッと力をこめながら、なおも上の方の枝へと、登っていきました。

いよいよもうこれ以上は、登れないという所まで登りましたが、もうその時は、幽霊のやせ細った手が、法印さんの足首を、つかみそうになりました。

法印さんは、最早これまで、どうにでもなれと思いき、高い松の木の上から思いっきり飛びおりました。

木の上から眺めると、三間位（六米程）の高さだと思いましたが、死ぬ気で飛びおりて見ると、なんと、地面から三尺（一米ぐらい）位の、高さしかありません。法印さんは、ハテナ、不思議なこともあるもんだと、あつけにとられてしまい、ぼかーんとしてしまいました。と、あんなに真暗だったあたりが、急に明るくなり、空を仰ぐと真昼の太陽が、頭上で輝き、九ツ（正午）

を告げる鶏の鳴き声が、急に遠くの方から、きこえてきました。

法印さんは、年老いた古狐に、まんまと仕返しされたのでした。

その後法印さんは、生きものである限り、決していたずらしたり、いじめたりしてはならないと、自分で自分を、戒めるとともに、周囲の人々にも、この話をして聞かせながら、諭したということです。

狐の仕返し

小丸 山名 紫川

昔、お城の
お殿様が、
朝早く、数名
の家来を、お
連れになつて、
近くの野山に
秋の狩に出
かけられ
ました。
大手門
より



大手通りを真つすぐにいかれ、下町から欄干橋へと、馬を進めて行かれました。まだ夜が明けて間もない時刻で、人通りありませんし、あたりは、ひっそりと静まりかえって

います。

その時
のことで

す。馬上

の殿様が

「アレーッ」

と、お声

をお立てに

なり、円福寺

下を流れる、小

井手川を指さされま

した。お伴の家来たち

はびっくりして、殿様が

指さされた方をじっと見つ

めますと、一人の若い女が、

幼ない子どもを、だきかかえて冷たい流れの中に立ち、
こちらを眺めているのです。

一同が、この怪しい女を見ているうちに、お伴の一人
が、あの女は、新小路の〇〇家の若嫁子の様だと申すの
です。

殿様の命令で、家来の一人が、水の中の怪しい女に近
づき、

「あなた様は、〇〇家の若嫁様ではありませんか」

と、たずねました。女は顔色も変えず、だまってコック
リとうなずきました。そしてそれ以上は、いくら尋ねて
も、ただ、だまりこくっており、まるで気でも失ったよ
うに、口をきこうともしません。それで二人の家来が手
とり足とりして、無理矢理に、川から引っぱり上げ介抱
しながら、新小路の〇〇家に、送りとどけました。

こういう事だったので、殿様も、お気色が勝れられず
その日の狩はお取り止めになり、お吉が茶屋で、しばら
くお休みになり、間もなくお城にお帰りになりました。

殿様が御帰城になり、このことが城中に、広まります
と、女中達の怖がりようは一通りではなく、夕方頃から

は、誰一人出歩く者は、いませんでした。

〇〇家については、その後、いろいろとお聞き調べが
ありましたが、当の若嫁ごは、大変な熱が出て、うなさ
れると共に、只こんこんと深い眠りについて、子どもが
泣いても、目もさめ

ません。それで

医者様を呼んで

手当を加えま

したが、一

向によく

なりませ

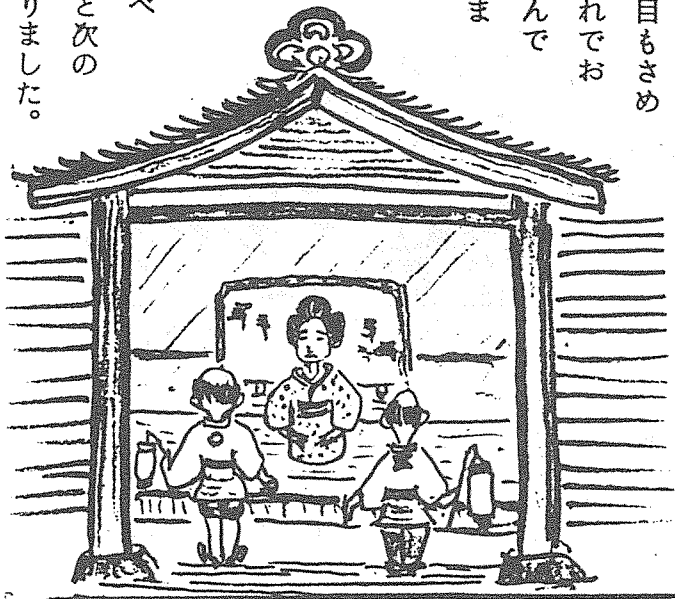
ん。

ところが

殿様がお調べ

になりますと次の

ことがわかりました。



昨夜ウシの刻（夜中の二時頃）に、嫁の実家から、二人
の者が、使いにきたのですが、二人ともそれぞれ、二張
りの定紋のついた提灯を持っておりました。二人の中の

一人は、嫁が知っていた者だったようです。そして使いの者がいうには、

「奥方様のお父上様が大病にかかれ、厄篤の状態ですから、夜中ですが、早速お出でになる様にとのことでございます。私どもがお迎えにあがりました」

というのです。嫁女は、あまりにも突然なことに、大層驚きまして、仕度もそこそこに、赤ん坊を抱いたまゝ、親元へ帰って行きました。

と、その家の主人と、家族の者達が、申し出たというのです。

又、藩の盜賊方の取り調べでは、提灯を持った二人の迎えの者が、御門を通った跡がないこと、また〇〇家の若嫁が、子どもを抱いて、御門を通った跡がないことなどが、わかりました。

☆後の評判

〇〇家の若主人、太郎衛門さんが、数日前胡麻山で、狐の子をとられたとか、撃たれたとかいうことです。この狐は、お仙女狐の一族であったとかの評判でした。そ

の親狐が、子狐の敵をとるための、しつぺ返しだったとのこと、そして、三か所の門を通らずに出たのは、〇〇家の裏から、お濠をわたり、脱け出たのだということでした。

又、この若嫁ごは、永い間気抜けしたような様子で、ぶらぶらと過ごしておりましたが、数か月後には、自然に快復されました。

無駄な殺傷を、決してしてはいけないと、後々の世までも、人々の語り草となっています。

おるかゝおるかゝ

山名重勝筆録より

昔、高月のある家に、年老いたお婆さんが、一人さみしく暮らしていました。

ある日のこと、夕暮れが近くなる頃、一人の薬売り（富山の商人）が来て、薬の入れかえや、勘定などを済ませ、後は世間話を面白おかしくしているうちに、すでに夕闇が迫ってきました。薬売りの男はお婆さんにいいました。

「もう大分暗くなってきました。今から町へ出て、宿屋を探すのも厄介なことだが、今夜一晚、ここに泊めて頂くわけには参りませんか？」

と、頼みました。

お婆さんは、毎年来る薬売りで、よく知っていましたし、その上大変正直な男でしたので、心のやさしいお婆さんは、快よく頼みをきくことにしました。

「しかし、お見かけ通りの貧乏暮しでございます。何のおもてなしも出来ません。それでよかったですら、どうぞ

お泊りください。」と、いいました。

あたりが暗くなる薬売りの男のため心のこもった夕食を整えてやりました。※



そして、いよいよ頃、老婆は、このに粗末ながらも、を用意し、夜具も※それが済むと、男に向かっていいました。

「どうぞ、ゆっくりお休みになつて下さいまし、私はこれから隣村の親せきに出かけますが、遅くなれば先方に泊ることになります。そこで一つお願いがございます。」

と、いいながら、一寸考えていましたが、

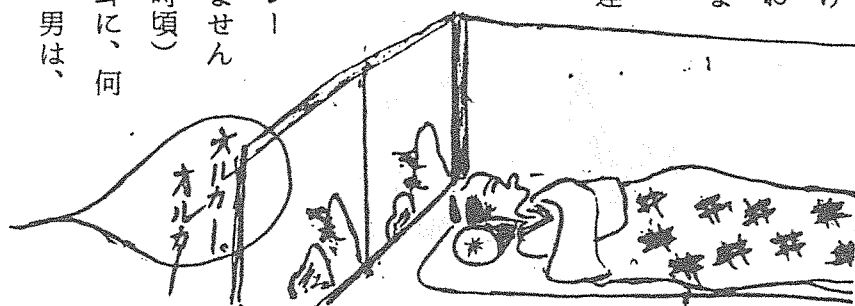
「実は夜が更けて、真夜中頃になりますと、奥の部屋の方からおるか？ おるか？ と弱々しく哀れな声がかこえてまいります。その時は、何度でも、おるよ。」

おるよ。と繰り返し返事をしてください。いく度でも、くどく呼びかけましても、同じように、おるよ、おるよ。と、受け答えしてくださいまし。」

と、頼みこんで、迎えに来た者と、連れ立って出かけていきました。

旅の商人は、旅の疲れもあって、食事を済ませると、早速床に入りましたが、やがてかすかな寢息をたてて眠ってしまいました。

夜はだんだんと更けて、あたりはシーンと静まり返って、物音一つ聞こえません。そのうちに子の刻（夜中の十二時頃）になると、グッスリ眠っていた男の耳に、何か怪しい音が、聞こえてきたのです。男は、



「はっ」と思い、息をこらしていますと、老婆のいった通り、奥の部屋から、細い蚊の泣くような声で、「おるか。おるか。」と、何者かの声が、聞えてくるではありませんか。男は、いつけられた様に、「おるよ。」

「おるよ。」と返事するのですが、どうしたことかいつまでたっても、止めません。既に同じことを、かれこれ数十回も繰り返しているのです。男は余りにもうるさく、眠ることもできませんので、後はもう知らんふりを構え、黙ってしまいました。

ところが、奥座敷の方から、静かではありますが、衣を引きずるような気配がするのです。しかも、だんだんと近づいて来る様子です。一体何者なんだろう？ 男はもう気が気ではありませんが、目だけはそっと奥の方を見つめています。間もなく、ふすまが少しずつ開いて、その隙間から、顔を突き出した者がいます。男がよく見ると、さあ大変肝をつぶしてしまいました。それもそのはずです。手や足は骨と皮で、目はららんと光り、その上真白な髪の毛をふり乱し、今にも飛びつきそうな怪物です。その姿は、まるでこの世の者

とは思われません。正に怪物そのものです。その怪物はなおも、ジリジリと男めがけて、這い寄ってくるのです。男はこの意外な怪物の出現に、どぎもを抜かれ、口もきけず何もかもうちすて、玄關の方に逃げるのがやっとです。

抜けそうな腰に、力を入れまし



たが、ガクガクする足がもつれて、思うようになりません。やっとのことで外に出て、冷たい夜風に吹きまくられながら、逃げまわりますが、怪物は、どこまでもついてくるのです。そこで木戸口にあった、高い柿の木に飛びつき、よじのぼりました。上の方へ、上の方にと、一番高い枝に、つかまりました。しかし怪物も、やはり柿の木に、のぼってくるのです。そして、男と怪物との距

離は、次第に近くなり、早くも怪物の手が、男の足首に届きそうになりました。男はもう、どうすることもできません。

しかし、男はもうこれまでと腰に差していた扇子を手にするなり、怪物の頭めがけて、ハッシとばかりに、強く打ちおろしました。

ところが不思議なことに、この一打で、怪物の今の勢いは、どこかに吹き飛んでしまったように、静かに両眼を閉じ、恐しい容ぼうは見る見るうちに、おだやかで柔らかな姿となって、徐々にうしろへ、退ぞきはじめたのです。その中に怪物の姿は、かき消すように見えなくなっていました。

男はしばらくの間、ただあ然としていましたが、ようやく我に帰ると、柿の木からおりてきました。そして、全身から流れ出る冷汗をふきながら門の外を見ますと、どうしたことが、沢山のお坊さん達が、自分のいる方へと近づいてくるのです。

男のそばまで来たお坊さん達は、口をそろえていいました。